

# 日本IT書紀

## 217 会長公選

11 嚇躍篇  
卷之二十九 仙蹕

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二百十七

会長公選

一

服部正がソフトウェア産業振興協会の会長に就任したのは七二年九月である。その選任は理事会による推薦という手続きに拠っていた。

ソフト協の設立に奔走し、ソフトウェア業の自立に賭ける情熱の強さ、リーダーシップ、拠って立つところの企業規模からいって当然の結論だった。

七三年五月、服部はソフト協会長二期目の二年目（初代・北代誠彌が任期途中で降板したため、七一年六月〜七二年五月の一年間が一期、同年六月からが二期）に入った。ソフトウェア・モジュール技術研究組合は順調に事業を遂行し、ソフト協として取り組んだのはソフトウェアの流通と知的財産権の問題だった。

その結果、七四年四月、協会の附置機関としてソフトウェア流通促進センターが発足した。センター長には元行政管理庁の石原寿夫が突いた。清正清が後押ししたのに違い

ない。

七五年五月の総会でも服部が会長に推された。

日本ソフトウェアの代替機能として、ソフトウェア・モジュール研究組合の事業を発展・継承する「協同システム開発」の設立について、服部が料亭外交を展開したのはこの年である。

ソフトウェア業だけでなく計算センター業にも枠を広げ、情報サービス産業全体の大きなプロジェクトに発展させようとし、センター協の大野達男、塚本祐造と会談した。

七六年四月、協同システム開発（JSD）が発足した。

ナショナル・プロジェクトの共同受注窓口ができた。あまり語られていないことだが、服部はこれをもって一つの区切りとし、

——あと一年務めたら会長を降りる。

という意志を固めていた。

コンピュータアプリケーションズ（CAC）の大久保茂、ソフトウェア・リサーチ・アソシエイツ（SRA）の丸森隆吾や日本タイムシェアの伊藤正之、日本コンピュータ・システムの舟渡善作など、八社会以来のメンバーに内々に伝えていた節がある。

服部を信奉し、青年将校を自任していた丸森、伊藤ら若手幹部たちはおおいにうろたえた。

一九七六年十月二十五日付「情報産業新聞」は次のように書いた。

（次期会長について）各理事に聞いても、みなはれものに触るように一切ノーコメントと固く口を閉ざしている。「やりたい人はたくさんいるが、統率できる人は……」というのが本音のようだ。結局のところ、服部さんが「もう一期」ということに落ち着くのではないか。

この予測通り、七七年五月に開かれたソフト協総会は、服部の三期続投で決まった。会長をさらに二年引き受けるに当たって服部が考えたことは何だったか。

それにかかわるエピソードがある。語るのは情報処理振興課総括係長の職にあった有本俊幸という人物である。

有本は西川禎一が課長だった七八年に「総括係長」として登場し、八二年まで丸四年にわたって在籍した。官僚の世界では二年前後で他の部署に転出するのが一般的だから丸四年というのは異例に長い。

通信回線問題、ソフトウェアの権利保護、情報処理技術者試験制度の改訂、情報処理システム安全対策、コンピュータ犯罪への対応など取り組むべき重要課題が山積して

いて、一貫して経緯を承知している現場統括者が必要だった。

かつ、情報処理振興課として新たな政策が求められたのは、ソフトウェア開発業ないし情報サービスの「産業としての構造」をどう作るか、ということだった。

「ソフト協の服部会長から目をさまされるような、以後の私の考え方の基本となるようなお話を伺ったことがあります。それが、適正利潤とリスク負担の関係です」

その話というのは次のようなものだった。

建設業界の大手というのは、二割や三割の利益を先取りして、仕事は下請けに回す。ひどい体質の業界だという人もいるが、元請けは仕事全体を仕様どおりに完成させる責任を負っており、仮に損害が発生した場合はすべての責任を取らなければならない立場にある。

その責任のリスク負担料が二割か三割か、適正か適正でないかは、そのリスクの内容によって決まることで、一概に高いとか低いとかの議論をするべきではない。

それまでモノを作って、売って利潤を得るといふ業界しか知らなかった私にとっては、まさに「コペ転」といふべきお話でした。

以後、今日まで、銀行、商社、保険業等の色々な業界の

方々と付き合っていました。常にこの服部会長のお話をサービス業の原点にして考えるようにしています。

文中にある「コペ転」というのは、一九七六年から一九八三年にかけて、週刊誌「マンガアクション」に長谷川法世が連載した『博多っ子純情』という青春マンガが出どころであるに違いない。筆者もけっこう夢中になって読んだ。

博多人形師の家に生まれた主人公・郷六平が、成長ともセックスに関心を持つ。セックスの体験が自分をガラリと変えるに違いないというのは錯覚であることを承知しつつ、郷六平はそれを「コペルニクスの転回」略して「コペ転」と名付けた。

服部が有本にこの話をしたのは一九七八年ごろのようで、つまり『博多っ子純情』に「コペ転」が登場した時分であった。とすると服部はすでに五十歳に近く、一方は三十歳そこそこの若僧だった。

服部は一面で教育者でもあった。

「服部さんは誰とでも、難しいことを分かりやすくお話しされました。構造計画研究所の服部としてでなく、業界の代表者として夢中で取り組んでいましたね」

こう語るのは国際会議などで通訳を務めた小島諄子である。

ともあれ、協同システム開発が発足した前後から、服部は情報サービス産業全体を俯瞰するようになっていた。彼の頭脳は新しい産業構造の形成を指向していた。

一つは国際化だった。日本の情報サービス産業が「日本」という場所に閉じこもってはいけな成成長が見込めない。積極的に世界に門戸を開き、主要な先進諸国の情報サービス産業と互角に戦える力をつけなければならない。それが日本の全産業の国際競争力を強めることになる。

もう一つは業界統一団体だった。ソフトウエア産業振興協会、日本情報センター協会の並立状態は、決して好ましいとはいえなかった。

## 二

ソフト協とセンター協の合併問題は、すでに発足四年目の七三年に表面化していた。面と向かって合併論を打ち上げた人はいなかったが、かなり具体的などころまで踏み込んで発言していたのは日本ユニバック総合研究所の常務だった永井篤三郎である。

この会社はセンター協、ソフト協の両方に属していた。それよりも永井篤三郎という人物は大所高所からの物言いをして人徳があった。

「ソフト協としてセンター協の活動や考え方をもちと知らなければならぬ。センター協もソフト協の活動をもっと認識しなければいけない。ひとつまじめに、センター協としては、またソフト協としてはこう考えるといった議論をやってみようではないか」

両協会から委員を出して検討委員会を設置する、という案だった。

続けて永井は言った。

「両方の協会とも二、三年時間をかければ、そのうちにそれぞれ活動や会員の状況が変わるだろうという考えがある。変貌の時期をつかまえて、いいチャンスがあるのでないか。ズバリ言うことは難しいが、例えば七四年四月をめどに話を進めていくという方法がある」

ジャーナリストの立場から発言したのは河端照孝だった。「オンラインやTSSをやる団体を作ろうという機運や、医療情報にかかわる団体を設立する動きもある。コンピュータの利用は無限にあるから、そのたびに業界団体ができたらたいへんなことになる。団体に入ってからメリットを直接求めるという考え方は問題だが、団体の運営側は会員のメリットを考えるべきだ。合併になぜ反対なのかをもう一度議論し、七四年四月をめどに検討すべきだ」

「七四年四月をめどに」という線は、服部と通産省との

間の暗黙の了解を示している。七二年に服部がソフト協の会長に就任したとき、

——ババを引いた。

と言われたのは、センター協との合併を進める役目を負っていたからであろう。

ところが服部の構想は協同システム開発設立をめぐる主導権争いで機を逸し、

——今期限り……。

と意志を固めたにもかかわらずそれは成らなかつた。

ソフト協会長三期目に入った服部が考えたのは、

——しからば「国際化」が合併の機会を作ってくれるのではないか。

いうことだった。

ところが一方のセンター協はそれどころではなかつた。

一九七六年五月、協会の会長人事が騒然とした。

ときの会長は大野達男である。

大野は一九一一年香川県に生まれ、三二年に関西大学専門部を出て野村證券に入った。野村證券を証券業界トップに押し上げた立役者・奥村綱雄の秘書役として活躍し、五三年に同社初代電算部長を務めていたとき、アメリカで発表されたばかりの真空管式電子計算機「UNIVAC12

0」を発注した。

電気式のPCSがようやくあちこちで利用され始めたとき、いち早く「これからは電子計算機である」と判断して、上司を飛び越して奥村の裁可を得た。

久和源次を課長に抜擢し、大阪大学を出たにもかかわらずテレタイプやエレベーターの保守に回されてくさっていた戸田保一を電算部に引き抜き、証券業界のコンピュータ利用を牽引した。

六六年、社内の反対を押し切って電算部門を分離独立させ「野村電子計算センター」を設立して専務、のち副社長を経て社長を務めた。

当時の計算センター業界では長老格であって、かつ協会の発足に当たっては我がことのごとく奔走し、七〇年に協会が発足したときから副会長の職にあった。稲葉秀三から会長の座を譲られたのは七五年、つまりつい一年前である。誰もが「続投」と思っていた。

「大野さんはセンター協会長に非常な意欲を示していました。意欲というより責任感だったかもしれません」

というのは、協会総務委員長として大野を間近で見ていた稲田博である。当時、第一ソフテック社長。

そのところに、富士通ファコム社長の中原啓一が、大野のあとに名乗りをあげたのである。

### 三

協会の規定では、

——会長は理事会の互選ののち総会で承認もしくは、他に立候補者がある場合は公選。

と謳っていた。

規定に従って公選になった。五月二十八日に開かれた総会前の理事会は、選挙の末、十九対九で中原を次期会長に選出したのである。

中原啓一は一九一九年に生まれ、東北大学工学部を出て富士通信機製造に入った。工場勤務が長かった。富士通がFACOM230シリーズの営業戦略の一環として、有隣電機精機の電子計算機センターを買収し、「ファコム」を設立した。このときファコムに出向し、日本IBMから移籍した安藤馨のあとを受けて社長に就任した。

中原が会長に立候補したのには、理由があった。

一つは協会の発足に際して、国産コンピュータ・メーカーが主導権を握ろうと画策したとき、大野と塚本が大いに反対した。二人は

——この協会は、国産メーカーを支援する団体ではない。ということ意見が一致していた。

——情報処理サービス業の健全な発展を促すのである。だからこそ、金岡幸二も日本計算センター協会の旗を降ろす決意をした。

大野の野村電子計算センター（協会発足時は「野村コンピュータシステム」）はUNIX VAC、塚本の伊藤忠電子計算センター（同「センチュリリサーチセンタ」）はペンディックスとコントロール・データ（CDC）、IBM、金岡の富山計算センター（同「インテック」）はUNIX VACとIBMという具合に、そろって外国製コンピュータをメインに使っていた。

このために、大野が口にした「外国製に負けない計算機を作ればいいだけではないか」という言葉が、外国製コンピュータを応援するかの印象を与えた。

——外国製コンピュータの計算センターに押さえ込まれた。

国産コンピュータ・メーカーは等しくそう考えた。第二は、副会長・塚本の独断専行が目立ち、舌禍が頻繁に起きていた。

塚本は「特攻隊長」「切り込み隊長」などとあだ名されたように、思うことを歯に衣着せずズケリと言つてのける性格だったし、大野はそういう塚本を好んでいた節がある。

同じ航空隊の出だが、塚本は金岡幸二に対しても

——あれは陸軍の飛行学生。こっちは海軍のゼロ戦乗り。というようなことを言つて、響きを買った。

金岡はさすがにムツとしたらしいが、年下でもあり、北陸人の気質もあつたであろう。塚本の発言が彼独特の正義感から出ていることを理解して、平静に対応した。

塚本の舌禍は後腐れのないサツパリしたものだったと見えて、多くから怨みを買っていた様子は無い。要は執行部批判の口実にされたに過ぎない。

この二つが下地を形成した。

引き金になつたのは協同システム開発の出資問題である。大野と塚本は、通産省主導で準国策会社の設立が企画されていたことを知っていた。

にもかかわらず広く会員に周知せず、メーカー系計算センターに関与させるのを意図的に隠した——という批判が生まれた。

だけでなく、会長会社の野村コンピュータシステム、副会長会社のセンチュリリサーチセンタは早々と「当確」を決め、独立系ではインテックと日本計算センターが入つたのみだった。有力と目された日本情報サービス、協栄計算センター、日本電子計算などが「落選」となった。

これに国産コンピュータ・メーカーは激怒し、中でもF

A C O M センター協議会の会長であった中原はおさまらなかつた。彼は富士通の取締役も兼ねていて、意気盛んだつた。

富士通はようやく国産コンピュータでトップ・シェアに躍り出ていたし、その地位をより強固なものにするのはセンター協会長の職も富士通陣営で固めるべし、という戦略が並行して存在していた。

さらにコンピュータの自由化を控えて、情報サービス産業を身内で固めておこうと考えたとしてもおかしくはない。全国に百社以上の会員企業を持つ F A C O M センター協議会をバックに、投票となれば多数を取れる自信があつた。

富士通は日立製作所に話を持ちこみ、H I T A C 情報センター・ネットワーク協議会加盟の計算センターの多くが中原支持を打ち出した。

先にあげた『日本情報センター協会一〇年の歩み』の座談会で、「(C)」と表記される塚本は

「稲葉先生と大野さんと私の三人で、あまり長く会長、副会長をしていると、三人が何か勝手なことをしてるよ

うに思われても困るということ……」  
と語っているが、ことの真相は塚本の降板で済むことではなかつた。

このときの混乱に嫌気がさしたセンター協の執行部と事

務局は、公選方式を捨て、会員に事前のネゴシエーションを施して平和裡に役員を選出する方式を編み出した。日本流の事なかれ主義にはかならない。

協会を二分した選挙に勝つて会長に就任した中原は、若手経営者たちに好意的に受け止められた。群馬電子計算センター(のち「ジー・シー・シー」)社長の松平緑は

「中原さんは、考えるよりも行動する人だつた。協会随一の行動派だつたのではないか」

と語り、  
「情報を会員に流すということだけではなくて、協会全体の仕事を増やそうという発想だつた」  
と続ける。

データー・プロセスコンサルタント社長の安藤多喜夫は、「協会の事業計画を立て、委員会を設けた。協会として何か共同受注をするということに相当意欲を燃やしていて、I P A から「異機種間データ伝送プログラム」の開発を受注した。ところが、当時のトップクラスの会員の中でも、共同受注した後、参加した会社がつぶれたら、協会の責任はどうなるのか、などといった馬鹿げた論議が出てきて、会長の政策に反対するところが出てきた」

と述懐している。

「青年将校」を自任していた協立計算(のち「コルネット



ト」と改称後、アイネスに吸収合併) 社長だった高島洋一はこう語っている。

「非常に行動される人だったから面白かった。電電公社問題にしても、お前、市場対策委員長なんだから、一緒に来い、ということ、彼と金岡さんと私とで会った。その時の話がもとなつて、その後、公共企業体のあり方を審議していた政府の会議の公聴会で公社を相手に、おかしんじゃないか、とやったわけだ」

その中原は、一年半後の七七年十二月、唐突に会長を辞任することになる。

富士通本社の判断で富士通ファコムが解消することになったためだった。親会社の一存で協会の会長が左右されるという事態の出来に、センター協は再び揺れに揺れた。任期の残すところを副会長の谷澤一郎(日本情報サービス社長)が代行したが、七八年五月に選任された新会長は日立系列の桑江和夫だった。

大野II塚本体制が転覆された直後、業界では

——メーカー三社は、センター協会長を系列会社でたらい回しにしようとしている。

という話の流れでいた。日本ビジネスコンサルタント(NBC)社長・桑江の就任は、その「うわさ」の信憑性を高めることになった。

困ったことになったのはソフト協、なかんずく服部である。ソフト協、センター協の合併、統一団体の発足どころか、両協会の溝はますます深まり、お互いに「土百姓」と悪態をつくようなことまであった。

センター協の企業は、

——何もなかった土地を耕し、作物ができるまで頑張ったのは我われである。

という自負があつた。

対してソフト協の企業は

——計算センターは力仕事。我われは頭脳。

と考えた。

両者ともに正しく、ともに間違っていた。

~~~~~ 補注 ~~~~~

ソフトウェア流通促進センター ソフトウェア産業振興協会の附置機関として設置された。ソフトウェア製品の流通を促すため、その所在情報（製品名、開発会社、機能・性能、適用機種、取引条件、価格など）を収集し、コンピュータのユーザーに広く提供するものが設立の主旨だった。これに伴い仕様書や技術解説書の整備、取引における権利関係、法的環境の理解などに守備範囲が広がり、八〇年代に入ってソフトウェアの知的財産権を規定する法律「ソフトウェア権法」案をまとめた。のちコンピュータ・プログラムの記述について著作権で保護することが決まったため、通産省と文部省が共管する財団法人・ソフトウェア情報センターに改組された。

長谷川法世 はせがわ・ほうせい／1945 …福岡市に生まれ福岡高校を出て東京芸術大学受験のため上京したが不合格となったためアルバイトを始めた。絵の具代を稼ぐつもりで貸本屋向け漫画本に漫画を描き始めた。サラリーマン向けコミック誌の登場で活躍の場を見つけ、NHKアナウンサーのような共通語では思うように感情を表現できないと主張し、雑誌社の反対を押し切って博多弁丸出しの『博多っ子純情』の連載を開始、当初は短期連載で終る予定だったが思わぬ人気で七六年まで八年にわたる長期連載となった。地元の気質や歴史、祭り、食べ物などを紹介し、折から九州出身のフォークシンガーの登場とあいまって博多ブームの火付け役となった。当人も愛郷心が強く、山笠は土居流れで毎年参加しているという。『博多っ子純情』は映画にもなり、九五

年にはNHK連続テレビ小説『走らんか』の下敷きになった。『博多っ子純情』週刊コミック誌「漫画アクション」（双葉社）に連載された。博多人形師の家に生まれた郷一平を主人公に、小学校から成人にいたるまで思春期の出来事を甘酸っぱく、かつカラッと描いた。幼馴染で恋人の小柳類子との結婚で終了し、並行して映画化された。単行本は計四十八巻が発刊され、現在も古書市場で人気がある。二〇〇一年十二月から「新・博多っ子純情」の連載が再開した。

# 日本IT書紀 217 会長公選

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。